

動物の生活と習性 : 『セルボーンの博物誌』序説

著者	生田 省悟
雑誌名	金沢法学 = Kanazawa law review
巻	41
号	2
ページ	217-234
発行年	1999-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/17840

〈動物の生活と習性〉——『セルボーンの博物誌』序説

生 田 省 悟

イギリスの小村セルボーンに生き、職務のかたわら、その地の動植物に関心を注ぎ続けた牧師補、ギルバート・ホワイト (Gilbert White, 1720-93)。彼は『セルボーンの博物誌』(The Natural History of Selborne, 1789)の作者として知られるが、この著作は当時高名な博物誌研究者であったトマス・ペナントとテインズ・パリントンに宛てた書簡をまとめたものである。上梓後しばらくは注目を集めなかったものの、やがて『セルボーンの博物誌』は頻繁に版を重ねるにいたる。産業化と工業化の進行する中、自然への親密感のこもったまなざしを窺わせる言説が人々の心を捉えてやまなかったからだ。今日でさえ、ホワイトの率直な言葉の魔力によって、失われた黄金時代への郷愁をかき立てられると告白する多くの読者がいる。ナチュラリストの聖書という評価が支持されるのも、この意味からすれば謂われのないことではないだろう。しかしながら、こうした反応はホワイトの活動の本質的な部分を問わないまま、単なる感傷に墮してしまふ危険性を孕んでいる。だとすれば、ホワイトを十八世紀における博物誌の現場に再度位置づけた上で、彼の営為を考察する必要があるはしないか。その視座のもと、本稿では、ホワイトを彼の時代における博物誌研究の主流をなしたリンネ (Carl Linnaeus, 1707-78) の理論と関連させることにより、『セルボーンの博物誌』の意義を考察したい。従来の研究ではなぜか無視に近い扱いを受けてきた側面ではありながら、ホワイトが終始、リンネに対して複雑な感情を抱き続けていたと思われるからである。

アリストテレスあるいはプリニウス以来の伝統を誇るヨーロッパの博物誌は、周知のようにルネサンス以降、学問としての体裁を急速に整えてゆくが、とりわけ十八世紀はしばしば博物誌の時代と呼ばれる。科学精神の勃興と平行して生じた自然界への関心の高まり、あるいは既知の事象に加え、続々とまたらされる非ヨーロッパ圏に関する膨大な資料と情報集積をふまえたとき、知の体系をいかに構築してゆくべきかが何にもまして緊急の課題とされていたのだ。時代の先端を行く科学としての博物誌に求められていたのは、学問としての普遍性であったと言ってもさしつかえない。その手がかりを模索すべく、博物誌研究者たちは観察と記載、つまり二重の意味を孕んだobservationの方法を形成することに精魂を傾けてゆく。しかも時代の動きは、研究のフィールドがセルボン教区のみに限られ、孤立状態を再三嘆いていたホワイトにとつてさえ、決して無縁の事柄ではなかった。ホワイトもまた、自らの行為である二重の意味でのobservationが博物誌の普遍化につながると確信していた。彼の切実な想いを伝えるものとして、たとえば、スイスの研究者スコポリに言及した二通の書簡がある。これらはほとんど間を置かずに書かれている。

特定分野の論文執筆者は出身がどこであれ、博物誌を愛する人々から何らかの敬意と賞賛を要求してしかるべき理由があると思われます。なぜなら、誰であれただ一人で自然の作品をすべて研究しつくすことは不可能である以上、部分を考察するこれらの著作家たちは、専攻分野にあってはおのおのが、より概括的な著作家以上に発見するところが正確であり、誤謬も免れうるからです。したがって、彼らは次第に普遍的かつ正確な博物誌にいたる道を切り開いてゆくことでしょう。³⁾

(P 31 ペナント宛第三一書簡)

ただ一地方ばかりを研究する人々は、およそ精通するのがかなわないほどのことに手を出す人々よりも、博物誌の知識をはるかに進歩させることができるでしょう。あらゆる王国、あらゆる地域には、その地にふさわしい特定分野の論文執筆者があつてしかるべきです。

(B7 バリントン宛第七書簡)

ここで提示された二つの相異なる研究の方向のうち、もっぱら批判の対象となつているのは、後述するようにリンネの立場に近いものである。その一方でホワイトは、「部分を考察するこれらの著作家たち」により「普遍的かつ正確な博物誌にいたる道が切り開かれる、また、「ただ一地方ばかりを研究する人々」が「博物誌の知識をはるかに進歩させる」と宣言してはばからない。外国の研究者の業績を賞揚する形を装いながら、ホワイトは自らの信ずるところの正しさを遠回しに訴えかけているのだ。その発言からは、観察と記載に関わる普遍性に対する自負の念がホワイトの底流をなしていたと容易に推測されよう。

さらには、こうした意識が『セルボーンの博物誌』に施された仕掛けとも密接につながっている事態を見逃すべきではない。ペナント宛書簡の冒頭九通は、実はこの作品が刊行されたおりに新たに創作されたものであった。その直接の目的は、セルボーン的地勢、自然、生活を読者に向かつて紹介することにある。だが、同時にそれは一つの教区をそれ自身で完結した小世界として切り取つてしまふ機能をも担っている。たとえ一地方に過ぎなくとも、自然界を貫く原理が働くからには、それを子細に辿るとき、博物誌は「普遍的かつ正確」になりうるに違いない。表面的にはあくまでも率直な語り口でありながら、ホワイトは巧妙な戦略を採用した上で、セルボーンの自然について、リンネが依拠したものとは明らかに異質な言語を介して語り続けてゆく。その意味からしても、博物誌の普遍性なるものを座標軸として、『セルボーンの博物誌』を考察する場合、ホワイトを時代の主流であつたりリンネと対置させることにより、この著作の新たな地平が見えてくるのではないか。

*

ホワイトが生きた時代にあつては、リンネのみならず、たとえばフランスでもトルヌフォール、ビュフォンといった人物が精力的に博物誌研究を實踐していた。自然界の体系化を目標として掲げた彼らの活動の力点はとりわけ、種の分類方法を確立することに置かれた。整合性を有する分類こそ、体系を構築する根本的な基盤に他ならないからだ。⁴ イギリスの場合も知を巡る動向の例外ではなく、前世紀の後半にはすでにジョン・レイ (John Ray, 1627-1705) などが優れた成果を挙げている。その影響もあつて、この国では動植物に対する関心が一般の市民階級の間でも大いに高まっていたのである。⁵ リンネの提唱した学説、特に植物分類に関するあのあまりにも有名な〈性の体系〉(Sexual System) はその明快さゆえにヨーロッパ全土に浸透してゆくが、なかでもイギリスにおいては急速に受容されていった背景にはこのような知的土壌が存在したからだと考えてさしつかえない。詳細については割愛せざるをえないが、一七五〇年代以降、リンネを紹介する著作やリンネに従つて自国の植物を分類する試みが相次いだのははじめ、リンネ体系に基づく植物配置を行なつたキュー植物園の創設(一七〇〇年)、リンネ協会設立(一七八八年)、あるいはエラスマス・ダーウィン(Erasmus Darwin)——チャールズの祖父——による、リンネ体系を概説した詩『植物の園』(The Botanic Garden, 1789-91) の刊行など、その間の事情を物語る事例は枚挙にいとまがない。⁶ ホワイト自身、さまざま手段を介してリンネに関する情報を手に入れている。⁷ 実際『セルボーンの博物誌』には、先人たるレイの業績に捧げられた深い畏敬の念のみならず、リンネとその著作に対する直接的な言及さえもが、かなりの頻度で現出してくる(ただし、一部を除けば、言及の様態は文面から窺うかぎり、中立的なものが多いことには留意しておきたい)。要するにホワイトは、同時代人リンネが席卷し

た時間を生きていたのだった。

改めて言うまでもなく、リンネがまず取り組んだ課題とは、彼以前の人々の成果を踏まえながらも、独自の植物の分類方法を確立することであった。その際の基準とされたのは周知の通り、雌薬と雄薬の数と構造である（雌雄薬分類法）。自らが〈性の体系〉と称したこの画期的なパラダイムに準拠することによって、リンネは植物界については自然界におけるすべての種の体系化を構想する。しかも、二名法——博物誌の普遍言語と想定されたもの——は、種間の差異を表象し、個々の種を明確に表記することにより、自然界の体系を指示する記号としての機能を果たすことになる。リンネの主要な著作の一つは文字通りに『自然の体系』（*Systema Naturae*, 1735）という標題を戴いているが、それは彼自身の意図を忠実に反映している。自然界のシステムを遺漏なく言語システムに還元しようとする欲望こそ、リンネの活動の根源をなしていたのだ。

多くの研究者が指摘するように、リンネの壮大な構想は近代科学の自己存在証明、さらにはは自然神学のありようと呼応する。つまり、自然研究が神の摂理の正しさを明らかにする行為だとされたのである。改訂を繰り返した『自然の体系』の扉には常に『詩篇』の一節、「エホヴァよ、汝の御業は如何にさわなる。これらは皆、汝の知恵にて創り給えり。汝の諸々の富は地に満つ」（一〇四・二四）が掲げられていたばかりか、他の箇所でも旧約の言葉がしばしば引かれている。だとすれば、リンネがめざした体系化とは、自らの信仰の証しを明確な形で提示すること、つまり、楽園のアダムに課された責務と同様に、被造物のすべてに命名し、それらを神の定めた秩序のもとに正しく位置づける試みと理解される。observationの二重性についてはすでに述べたが、それに加えて神の摂理に従うという意味を孕むことによって、この概念は三重の内実を持つものとして認識されるであろう。普遍なる博物誌の課題をより厳密に規定するなら、それはobservationの三重性／輻輳性を矛盾なく統合することに他ならない。

当然予測される事態ではあるが、「自然の体系」は初版では冊子ほどの規模であったにもかかわらず、新たな情報が得られるにつれ、記載事項が追加されてゆく。そして最終の一二版は本文が約二、四〇〇ページにも及ぶほどの膨大なものと化してしまう。地球上のあらゆる種を網羅することを自論んだ必然の結果であらうし、普遍への強烈な執念とも言えるかもしれない。先に引用したホワイトの言葉をここでふり返っておくなら、「誰であったか一人で自然の作品をすべて研究しつくす」、「概括的な著作家」、「およそ精通するのがかなわないほどのこと hands を出す人々」といった文言は、リンネの重流ばかりカリリンネその人に向けられた当てこすりだという解釈も可能となる。ホワイトはリンネにおける分類の言語の蔓延・自己増殖という、ある点からすれば滑稽に映りかねない事態を見てしまったとさえ考えられるであらう。

*

一方、ホワイトにしても神によって定められた自然界の秩序は当然受け入れられるものであり、彼の言う「普遍」もまた、神の存在を背景としているのは明白である。それならば、彼はどこに「普遍的かつ正確な博物誌にいたる道」を見ようとしたのか。それを考察する直接の手がかりは、〈分類〉という行為に対するさまざまな発言のうちに求められる。ホワイト自身も、博物誌における分類の意義と重要性は十分に承知していた。事実、バリントンに宛てた書簡では、セルボーン付近で観察した鳥類の一覧が提供される。その記載方法は、鳥たちの英語名とレイが当てはめたラテン語名に基いているが、注目すべきことに、ホワイトはそれらをリンネの分類に对照させているのである（B1、B2）。

しかしながら、ある特徴的な差異を捉えることによる分類、そしてそれと不可分の名称（リンネの提唱する普

遍言語)による記述を通じて行なわれる自然体系の構築が至上とされた場合、それが博物誌への大いなる貢献であると同時に、ある重大な欠陥を内包することをホワイトは感知する。あるとき彼には、外国の研究者を批判する一方でレイの業績を称える機会があった。その発言の根拠は、直接分類に関わる問題に求められている。

私の見るところ、外国の分類学者("systematics")⁽⁸⁾は彼らが行なう種の区分においてあまりにも漠然としております。それはほとんど例外なく一、二の具体的な特徴から成り立っており、その他の記載はごく概括的な用語に終始しているのです。しかし、わが国の卓抜した人物であるレイはあらゆる用語や言葉に何らかの正確な観念を伝える唯一の記述者で、たとえ彼の信奉者や模倣者たちに新たな発見や最新の情報といった利点があるにせよ、彼らをはるかに凌いでいます。

(B 10)

「一、二の具体的な特徴」をめぐる批判的な口調は決して謂われのないものではない。すでに述べたように、リンネの〈性の体系〉はまさにホワイトの指摘する分類を基盤として誕生したからだ。その意味からすれば、ホワイトの発言はリンネの体系構築の本質をつくもと言えるであろう。一部の特徴に注目した観察が行なわれ、差異に基づく記載の方式が確立されると、今度は逆に記載の様式が観察の様態を規定する、つまり、対象のうちに見えない部分、見ようとしな部分を作り出してしまうという矛盾に満ちた事態をホワイトは暗に指摘している。そればかりか、observationにおいて観察と記載との乖離が生じることへの危惧をも抱いている可能性すら考えられる。

リンネの〈性の体系〉は本人も認めていたことだか、いわゆる人為分類に準拠しており、当初から、フランスの研究者などから非難を浴びたという歴史を持つ。彼らが種の特徴と形態をより包括的な形で捉える、自然分類

を提唱していたからだ。⁽⁹⁾したがってホワイトの批判には、このような論議のあり方と軌を一にする側面があると思われる。ただ、彼の場合、単に分類方法の如何が問題ではなく、博物誌の主要な課題は分類とは別のところにあるのではないかと予感こそが重要な意義を担う。というのも、分類の言語を介した位置づけから、種の差異と多様性に秩序が与えられることについては共鳴できるものの、セルボーンにおける日常にこだわり続ける限り、そのみでは自然界の実態が解明されたとは言えないからだ。だからこそホワイトは、分類が自己目的化されることに否定的な立場を取らざるをえない。彼は次のように断言したことさえあった。

植物学に対するお定まりの反論は常に、それが空想力を楽しませ、記憶力を行使する研究であって、精神を高めたり真の知識を何ら向上させはしないというものでした。そして、この学問が単なる体系的分類の域を出ていない場合、こうした批判はまさしく当を得たことになります。しかしながら、この非難を拭きたいと願うほどの植物学者ならば、決して名称の一覧のみに満足すべきではありません。．．．だからといって、体系を放棄する必要があるということには繋がりません。体系がなければ、自然というフィールドは道なき荒野と化すでしょう。それでも、体系は学問に奉仕すべきなのであって、主要な目的であってはならないのです。(B40)

ホワイトにとって、分類は自らが思い描く博物誌研究の主眼ではありえない。彼が洩す「自然というフィールドに観察(“observation”)の余地はつきることがない」(B5)といった感慨は、まさに偽らざる想いを伝えるものなのであった。

『セルボーンの博物誌』においてホワイトは、リンネの体系とその言説の規範から排除されがちな部分にむしろ焦点を当てる。時代の主流であった〈分類〉とは異なる、独自の領域を模索したのだ。それが何であったかは、次のような発言から容易に推測することができる。

「王立協会」会員の皆様が私の意図をこゝ了解下さり、私の論文を博物誌、つまり動物の生活や習性(“the life and conversation of animals”)に関する一層詳細な探究を促進させるための慎ましい企てとお考えになられるよう、望むものです。

(B 17)

「動物の生活や習性」——これがホワイトの心に根をおろしていた事実は、先の(B 10)の直前に記された文面からも裏づけられる。この部分は自己を直接表面に出すことを回避する形ではありながら、かなり強い口調を感じさせる要素を孕んでいる。しかも、他の研究者に向けた批判と絡められているのは、自らの確信の正当性を伝えようとする願望に他ならない。

あなたもご承知のように、動物学者はたいして意味のない記述と二、三の同義語をあまりにも安易に受け入れる傾向があります。なぜなら、すべての仕事がその人の書齋で行なわれてしまうからです。しかしながら、動物の生活と習性の研究(“the investigation of the life and conversations of animals”)ははるかに骨が折れる、困難な課題なのです。活動的で探究心の強い人、もっぱら田舎に住んでいる人々でなければやり遂げることが不可能なのです。

(B 10)

ホワイトは安易な方向に傾きやすい分類行為を受け容れようとはしない。そして、「動物の生活と習性の研究」こそが博物誌の根幹であることを訴える。¹⁰ しかも、その課題を担うのが「もっぱら田舎に住んでいる人々」、つまりホワイト自身だと付け加えることを忘れない。¹¹ こうした主張こそが相互に関連し合いながら、彼の日常的な営為の核を形成しているのである。

ヴォルフ・レベニースやドナルド・ウスターが論じる「自然の配剤」(“economy of nature / nature's economy”)はこの脈絡においても浮上してくる。¹² この概念はリンネが一七四九年に発表した論文で正面から取り上げたものである。¹³ その詳細な検討はレベニースやウスターに委ねるとしても、要するに「自然の配剤」とは、自然界が神の定めた秩序のもとで構成され、被造物のそれぞれが固有の場を占めると同時に互いに互いに関連し合うという考えであり、すべてを神の摂理と叡知に帰属させようとするものである。ホワイトにしても「自然はことごとく満たされている」(B 20)という認識に立ち、自然界を統率する原理に思いを馳せる。たとえば、彼は自らの新たな知見であるタマジカの呼吸孔に言及したことがあった(P 14, P 20)。その際、「尋常ならざる自然の備え」(“extraordinary provision of nature”)という物言いが反復されていることは注目に値する。¹⁴ 『セルボーンの博物誌』における記述の論理は、またしても自らの観察と分かちがたく結びつくのである。しかも、飽くことのない視線は、一般に親しい動物の「生活と習性」でさえ決して見逃したりすることがなかった。

これらの池に関する一つの事情を、たとえそれがこの地だけに見られるものではないにしても、私は黙って見逃すわけにはまいりません。つまり、牛の本能にまつわる話なのです。夏、暑さが厳しい時刻の間には牝牛、牝牛、子牛、若い牝牛のいかんを問わず、すべての牛は常に池に避難します。池の中では、蠅の攻撃もそれほ

どではありませんし、水の涼気を吸い込み、あるいは腹まで、あるいは足の中ほどまで没かりつつ、朝の一時ころから午後の四時ころまで反芻を続けては慰めを求めるのです。そして、その後は再び食事に戻ります。このように一日の大半を過ごす間、牛たちは大量の糞を落とします。糞には虫たちが付きます。すると魚に餌が供給されることとなりますが、もしこの偶然がなければ、魚は餌に不自由するでしょう。かくして偉大な配剤たる自然 (“nature, who is a great economist”) は、ある動物の気晴らしを他の動物の糧に変えるので

(P 8)

この一節で注目すべきなのは、ホワイトが決してドグマに走るのではなく、自然の配剤をあくまでも日常の精緻な観察の場から導き出している事実である。この姿勢は『セルボーンの博物誌』において変わることがない。

洪水に繰り返し襲われる土地は常に瘦せています。恐らくその理由は、ミミズが溺死するからだと思われる。まったくもって取るに足りぬ昆虫や爬虫類でさえ、自然の配剤 (“economy of nature”) にあつては、無頓着な人間が承知するよりもはるかに重要な意味を持っているのです。注意を引くことがないほどの微小さ、数の多さ、多産能力のゆえに、こうした生き物は強力な作用を及ぼします。ミミズは外見こそ小さく、自然の連鎖の中の卑しむべき環ではありますが、もしこれが失われたならば、悲しむべき空隙がもたらされることでしょう。⁽¹⁵⁾

(B 35)

ホワイトは生物の生が自然によって規定された原理、ひいては神の摂理に基いて営まれることを訴えかける。それは観察を継続することによってのみ、説得力を帯びるものであろう。

〈配剤〉(“economy”)の概念は、その語源にまでさかのぼらなければ正しく理解されえない。つまり、〈管理、統治〉などを意味するギリシヤ語の *oikonomia* ならばにはその語根 *oikos* (家)、*nomos* (法則性、神の定めた所与の法則)を無視することはできないのである。ホワイトの言う「自然の配剤」、さらに自然界を貫く神の摂理は、自らの *oikos* に相当する小世界セルボーンでさえまぎれもなく作用している。個々の生物／被造物の具体的な「生活と習性」こそ、それを明確に表象するものなのだ。博物誌研究者にとって、神の摂理を理解する契機は、神によって創造された被造物において他にない。「生活と習性」を観察し、その実相を正確に記述することが、神の摂理を証明すべき普遍的な博物誌だとする予感はこのとき確信に変わる。

ちなみに、ある伝記作者によれば、ペナント宛第二十八書簡の結びは当初、「動物の生活、習性、摂理に基づく営み」(「博物誌の生命にして魂」) (“The life, conversation, and economy of animals are the life and soul of natural history”)であったとい⁽¹⁶⁾う。それが削除された理由は判明しないが、動物の自律性をあまりにも強調することが危惧されたのかもしれない。いずれにせよ、分類の言語に基く体系化からだけでは解明しえない生物の多彩な活動、そしてそれを規定する神の摂理にホワイトは拘泥する。

*

『セルボーンの博物誌』において自らの意見を語る際、ホワイトはしばしば他者に向けた批判に添える形態を選択する。しかも、自らの心情でありながら、彼は三人称に託すという手段に頼ることを通例としていた。だが、ときとして仮面をかなぐり捨て、一人称で直接訴えることがあった。

鳥類に関する私のささやかな分類にご不満を抱いてはおられないのを知り、大いに嬉しく思われてなりません。その記載に何らかの価値があるとすれば、それは几帳面さに由来するはずで、と申しますのも、何か月もの間、私は観察すべき鳥の表をポケットに入れ、徒歩や馬で職務に赴くおりには、どの鳥が鳴き続けているか、あるいは鳴きやんだかを、一羽ずつ毎日書きとめたのです。したがって、私の観察した事柄の正確さは、いかなる人物の報告書にも劣らないという絶対の自信がございます。

(B3)

神の摂理を博物誌の現場から明らかにするという observation のあり方からすれば、ホワイトの立場は必ずしもリンネのそれとは拮抗するものではない。しかしながら、こうした宣言から理解されるように、ホワイトはリンネとは異なる方向に意義を求め、セルボーンの日常から普遍に通じる博物誌研究者としての証しを見出し出してく。

・・・と申し上げますのも、あなたが非常に心の広い紳士であり、ご理解を示して下さいとお方だと承知しているからです。しかも著者が野外のナチュラリスト(“an out-door naturalist”)であること、すなわち他人の著作からではなく、対象それ自体から観察する事柄を得ていることを公言する場合に、とりわけ、あなたが心の広さをご理解を示して下さいと了解している次第です。

(B1)

この一節には、生涯を賭けたホワイトの想いが凝縮されている。しばしば驚異や驚嘆を覚えずにはいられない観察から直接的な知見を獲得し、さらには自然界の背後に潜む原理を解明しようと試みる「野外のナチュラリスト」。同義語反復を感じさせる奇妙な自己規定ではあるが、あえて「野外の」なるエピソードを付したことは強い意

思が働いている。セルボーンにおける実践と密接につながる「野外のナチュラリスト」こそ、ホワイトのアイデンティティに他ならなかった。分類と体系化に主眼を置く書齋のナチュラリスト的方法、他人の著作を踏まえた研究に向けられた批判はすべて、この自己規定に由来する。

ホワイトによる observation の実態が最も顕著に窺われる事例は、彼が愛したツバメ属に関するものである。たとえば「*house martin* / *martin*」の営巣は次のように記されている。

この鳥はしばしば、下部に突き出した棚などが無い垂直の壁に巣を造りますので、肝心の基礎部分を確実に固定させるには多大な努力が必要となります。それによって、巣の上部を安全に支えることができるわけです。その際、爪でしがみついているばかりか、支柱代わりに尾を壁に強く押しつけることで、いくぶんかは体勢を保持しています。そして、このように体を安定させながら、巣の材料を熱心に煉瓦もしくは石の表面に塗ってゆくのです。とはいえ、でき上がった巣が柔らかく乾燥していない間にそれ自体の重みで落下してしまうのを避けるため、この用意周到な建築家は慎重かつ忍耐強く、作業をあまりにも性急に進めないでおきます。ですから、朝のうちだけ巣造りに励み、残りの時間はもっぱら食事と娯楽で過ごし、巣が乾き固くなるまで十分に時間をかけるのです。

(B 16)

リンネにおける場合と対比したとき、この詳細な観察と記載の特質はより明確に理解されるであろう。『自然の体系』の鳥類一〇一には「*ツバメ属*」が置かれており、その記載は「くちばしはごく小さく、湾曲し、突き錐状で、基部は偏平」のみである。また「*ツバメ*、*hirundo urbica*」は、参照文献を除けば、「尾羽根には斑紋がなく、背中は青みがかった黒。[別名] *hirundo agrestis* あるいは *nastica* ともいう。ヨーロッパに生息し、屋根の

下の壁に「営巢」とあり、さらにへシキオスなる人物の言葉、「ツバメが来た、来た。美しい年、美しい季節をもたらしつつ」が引かれているのみに過ぎない。¹⁷リンネの記載が必ずしも無味乾燥なものだとは言えないにしても、分類に基づく体系化に対する彼の願望はもっぱらこのような形態を取っている。ホワイトの observation とは、かなり異質な方向が求められたのであった。¹⁸

『セルボーンの博物誌』の言説から見えてくるのは、繰り返しになるが、ホワイトも普遍性を確信していることである。その意味で、彼もやはり博物誌の時代十八世紀の人間に他ならない。リンネを軸とする分類／体系化の動向を目的あたりにする一方、小宇宙たる小村で野外観察を継続し、神の摂理に従って営まれる「動物の生活と習性」の実態を読み取ること、そしてその忠実な言語化に努めること。それが、博物誌の本流から外れてはいないものの、observation の意味するところを明らかに認識していたであろうホワイトが自らに課した命題であった。彼は博物誌の新たな領域、新たな可能性を密かに見据えていたのである。

註

- (一) たとえば、イギリスにおける近代博物誌を社会文化史の視点から詳細に論じた D.E. Allen, *The Naturalist in Britain: A Social History* (London: Penguin, 1976), 50-51 はアメリカの詩人 J.R. Lowell を引用しつつ、次のような評価を掲げている。
- 「ローウェルは『セルボーン』を〈樂園におけるアダムの日誌〉と呼んだ際に、真実をほとんど言い当てた。というのも、この著作は確かに、静かなる男の遺言だからである。この男は世界と自分自身に対して安らぎを覚え、自らが生きる地球のささやかな片隅に関する知識を深めることに満足し、心の平衡を完璧に保持していた。セルボーンとは、私たちひとりひとりのうちに存在する密やかな、自分だけの教区なのである。私たちは、『セルボーン』がこれほど早い時期に、しかも、あたかも自然に会得されたかのような簡潔さと気品を湛えつつ、世に現われたことに感謝しなければならぬ」。一般読者が抱く印象は、こうした評言にほぼ集約されると考えてさしつかえない。

(2) ちなみに、ホワイトの優れた伝記とされる Richard Mabey, *Gilbert White: A Biography of the Author of THE NATU-*

RAL HISTORY OF SELBORNE (London: Century, 1986) に於てリンネおよびリンネ体系に対する言及がわずかに二度しか行なわれていない(102, 162)。

(3) 「セルボーンの博物誌」から引用は、Gilbert White, *The Natural History of Selborne*, ed. Richard Mabey (London: Penguin, 1977) に依拠した上で、拙訳を施したものである。

(4) 十八世紀における博物誌の動向については、以下を参照。Scott Attran, *Cognitive Foundations of Natural History: Toward an Anthropology of Science* (1990; Cambridge: Univ. P. 1995); Nick Jardine, et al., ed., *Cultures of Natural History* (Cambridge: Univ. P. 1996); ユォルフ・レムニース (小川さくえ訳) 『十八世紀の文人科学者たち』(法政大学出版局 一九九二年)、同(山村直資訳) 『自然誌の終焉』(法政大学出版局 一九九二年)、ハインツ・ゲールゲ(梶田昭訳) 『リンネ』(作品社 一九九四年)、木村陽二郎『ナチュラリストの系譜』(中央公論社 一九八三年)、西村三郎『リンネとその使徒たち』(人文書院 一九八九年)、松永俊男『博物学の欲望』(講談社 一九九二年)。

(5) イギリスにおける状況については、以下を参照。Allen, C.E. Raven. *The Naturalists from Neckam to Ray: A Study of the Making of the Modern World* (Cambridge: Univ. P. 1947); Keith Thomas, *Man and the Natural World: A History of the Modern Sensibility* (New York: Pantheon, 1983).

(6) Allen 40-43 参照。

(7) ちなみに、弟の一人ジョンは海軍付き牧師として、長らく海外に駐留していたが、博物誌にも関心を抱き、リンネとも一時期書簡を交したことがあった。

(8) “system”の類語である“systematic”が「分類学」とりわけ「リンネ分類学」としての意味を担うようになったのは十八世紀後半のことであった。

(9) ジョン・レイもまた、自然分類に近い分類方法を提唱していた。リンネはレイの考えに影響を受けながらも、人為分類を採用したという。

(10) コーで「習性」とした“conversation”にはさまざまな含意があり、厳密な意味を特定するのが困難な言葉である。コーでは OED, 6 を参照した上で「習性」という訳語を採用した。

(11) 「セルボーンの博物誌」のへまえがきにおいて、ホワイトは次のように述べている。「著者はこのようにも考えております。すなわち、もしも定住者が自分たちの暮らす地域に何らかの注意を払い、周囲の事物に関して自らの思うところを公にするな

ら、そうした資料からは完璧なことこの上ない郡誌が導きだされるでしょう。なお、ホワイトとセルホーンという土地との結びつきについては、拙論「ホワイトのセルホーン——博物誌と「場所の感覚」」(『言語文化論叢』第一号、金沢大学外国語教育研究センター、一九九七年)を参照されたい。

- (12) ウォルフ・レベニース『十八世紀の文人科学者たち』、二五―三四ページ、Donald Worster, *Nature's Economy*, 2nd. ed. (1977; Cambridge Univ. P., 1994), chap. 2. なお、"economy"が「神の摂理」と密接に関わっているのは明らかである。したがってこの概念に対して「経済」という訳語を充てるのは必ずしも適切なことではないと思われる。

- (13) この論文は教え子の学位請求に際し、リンネが代筆したものである。『セイブ』一七七五年に"Oeconomy of Nature"の標題で英訳、出版された。Carl Linnaeus, *Miscellaneous Tracts Relating to Natural History, Husbandry, and Physick*, trans. Benjamin Stillingfleet (1775; New York: Arno P., 1977), 39-129 参照。

- (14) (P. 20)では、「この言葉に続けて、『創造における神の叙知の新たな一例』("a new instance of the wisdom of God in the creation")とあるが、これはレイの著名な作品『The Wisdom of God Manifested in the Works of Creation』(1691)の標題を挙げたものである。なお、この著作については、復刻版(New York: Arno P., 1977)を参照した。

- (15) この一節はチャールズ・ダーウィンの最後の著作に影響を与えたものとして有名であるが、Worster 78は、「このように記載に現代エコロジー思想の主要な源流を求めている。」

- (16) Walter Johnson, *Gilbert White: Pioneer, Poet, and Stylist* (London: John Murray, 1928), 28.

- (17) 島崎三郎編訳「リンネ 自然の体系」第一巻(改訂第一〇版)(山階鳥類研究所、一九八二年)、一三六―一三九ページ。

- (18) しばしば指摘されることではあるが、リンネの体系は聖書の伝統のドグマを踏襲している。周知の通り、リンネは初めて人間を「自然の体系」に含め、「動物界」に位置させた。ただ、人間に *homo sapiens* なる学名を当てはめた事実が端的に物語るように、あくまでも被造物の階層性、あるいは人間中心主義の正統を承認したのだった。一方、ホワイトは動物の生に固有の意義を認めている。しかしながら、「動物の生活と習性」に関わる観察と記載は「ヘイワツバメ」のそれからも明らかのように、人間との類推に基いて行なわれてしまう。この事態が、形を変えた人間中心主義であるとは考えられないであろうか(註(10)で、"conversation"は意味を特定するのが困難な言葉であると述べたのには、この点が気にかかってならないという理由があった)。

確かに、十八世紀の博物誌はさまざまな言説として立ち現われてくる。それぞれがつかつてないほど自然界に深く入りながらも、人間中心主義の伝統に確証をもたらし、ひいてはその後の自然認識を方向づけるパラダイムを形成したのではなかった。

か。だとすれば、この時代の博物誌を過去の現象として放棄するのではなく、今日の自然理解の根底をなすものという視座から解きほぐしてゆく作業が不可欠となるであろう。

* 本稿は、ASIJ-Japan（文学・環境学会）第四回全国大会（一九九八年一〇月一九日於広島市）で口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。